

箱根写真美術館 開館15周年特別展

Requiem レクイエム 吉田大朋 写真展

軽妙洒脱

Yoshida Daiho Photo Exhibition

会期：2017年4月5日（水）～5月29日（月）

会場：箱根写真美術館

時間：10:00-17:00（最終入場） 休館日：毎週火曜日

入館料：大人500円 小学生以下300円 未就学児童 無料



【展覧会開催について】

箱根写真美術館では、開館15周年特別展として、日本人として初めてフランスの『ELLE』本誌と専属契約を交わし、当時の世界のモードを日本へ伝える重要な役割を担った写真家、吉田大朋（よしだ だいほう）氏の作品展を開催することとなり、準備を進めておりましたが、2017年2月10日に吉田大朋氏が享年82歳で逝去されました。

吉田氏も当館での展覧会の開催を楽しみにして下さっていたことから、追悼の気持ちを込めて、当館の1・2階両フロアにて本展を開催させていただき運びとなりました。日本のファッション誌を創世期から牽引してきた偉大な写真家の仕事を展示させていただくことを光栄に存じます。

箱根写真美術館 館長 遠藤桂

【展覧会概要】

吉田大朋は1959年広告写真家としてデビュー、1965年東京オリンピック直後に単身ファッションの都パリへ渡り、日本初の『ELLE』誌専属フォトグラファーとして活躍後、1970年からはニューヨークに居を構え「MORE」（集英社）創刊号の表紙を1年間撮り、日本では「ハイファッション」「NOW」、「ミセス」（文化出版局）等に、また「an・an」（平凡出版）では創刊号から海外ロケでのファッション写真を発表しています。

当時、フランスではヘルムート・ニュートン、ガイ・ブルダン、アメリカではリチャード・アベドンやアーヴィング・ペンが全盛を誇っていましたが、日本でファッションを撮れる人物は、吉田大朋ただ一人だったのです。現在活躍している広告写真家の多くは、最先端のファッション誌の表紙を飾る写真と彼の名前を目にしてきたはずです。

二度目の渡仏の1975年からは世界的高名な宝石店「FRED」や「VOGUE」誌でも作品を発表しながら世界中に旅をして撮影を続けました。またフランスのブルボン王朝一族の末裔のご婦人たちの衣装を担当した伝説のクチュリエール、マダム・グレや日本の植田いつ子氏の作品を写真集に収める偉業を達成した非常に稀有な写真家です。

本展は吉田大朋アーカイブ（吉田佳代、河野和典、堀口桂子）の全面協力のもと、マダム・グレ、植田いつ子両氏のモード作品を中心に展示致します。

【作家紹介】

吉田大朋（よしだ だいほう）

- 1934年 東京生まれ。
1959年 準朝日広告賞受賞で広告写真家としてデビュー。
1961年 ファッション写真家としてデビュー。
1965年 10月 第1回目渡仏。パリに2年間滞在。日本人写真家として初めて「ELLE」誌と専属契約。
1967年 「ハイファッション」誌に写真を多数発表。
1968年 「an・an」誌創刊号より海外ロケのファッション写真を多数発表。ファッションフォトグラファーの先駆的存在となる。
1971年 3月第1回渡米、ニューヨークに一年滞在。
「an・an」誌と合同写真展開催、於日本橋高島屋。
1973年 全国カレンダー展で通産大臣賞受賞。
1975年 3月第2回目の渡仏。パリに3年半滞在。その間に「VOGUE」誌、「VOGUE HOMMES」誌にファッション写真を多数発表。
1979年 「巴里」写真集出版、文化出版局。
銀座ミキモトホールで「巴里」写真展開催。
1980年 「グレの世界」作品集出版、文化出版局。
1981年 「LES FEMMES」写真展開催、於銀座コダックフォトサロン。
「地中海・夏の記憶」写真集出版、キャノン・カメラ。
1982年 「吉田大朋と女たち」作品集出版、日本芸術出版社。
「古都 京の四季」写真集出版、朝日新聞社。
1983年 「古都 京の四季」写真展開催、於ミノルタフォトギャラリー。
1985年 「YOKOHAMA」写真集出版、横浜市庁。
1986年 「YOKOHAMA」写真展開催、於横浜高島屋。
1987年-1993年
ファッション写真、広告写真、ヌード写真、パリの風景写真等を発表。
2000年 「東・京・都・市」写真展開催、於銀座ニコソロン。
2001年まで東京総合写真専門学校講師を務める。
2017年 2月10日逝去、享年82歳。



撮影:河野和典(2006年)



「グレの世界」より © Daiho YOSHIDA



家庭画報より(世界文化社) © Daiho YOSHIDA



家庭画報より(世界文化社) © Daiho YOSHIDA

【関連情報・イベント等】

5月19日(金) 13:00~13:50 吉田大朋アーカイブ河野和典氏による特別解説

神奈川県西部地域ミュージアムズ連絡会 WESKAMSミュージアム・リレーが国際博物館記念事業として、強羅3館園(箱根美術館、箱根写真美術館、箱根強羅公園)で開催されます。

定員50名 参加費:3館で1,000円 申込方法:往復葉書で5月10日(水)必着

申込先:箱根美術館リレー係 宛 〒250-0408 神奈川県足柄下郡箱根町強羅1300 Tel. 0460-82-2623

当日のスケジュール: 10:00-12:00 箱根美術館→13:00-13:50箱根写真美術館→14:00-15:00 箱根強羅公園

【会場及び主催者情報】

共催: 吉田大朋アーカイブ / 箱根写真美術館 展示協力: 吉田大朋アーカイブ(吉田佳代、河野和典、堀口桂子)

会場: 箱根写真美術館 神奈川県足柄下郡箱根町強羅1300-432 ◆ 電話 0460-82-2717 ◆ FAX 0460-82-2717

開館時間:10:00-17:00(最終入場) ◆ 休館日: 毎週火曜日 ◆ 入館料: 大人500円 小学生以下300円 未就学児童 無料

URL <http://www.hmop.com> ◆ e-mail info@hmop.com 展覧会担当: 遠藤詠子

Requiemレクイエム 吉田大朋写真展「軽妙洒脱」に寄せて

河野和典 (KOUNO Kazunori)

吉田大朋（よしだ だいほう）は、1960年代から70年代にかけてパリに6年ほど滞在し、『VOGUE』、そして『ELLE』のファッションカメラマンとして活躍した。日本人写真家としては初めてであった。その実績から、1970年代には、アートディレクターでデザイナー、絵本作家としても名高く、さらには写真評論もこなし堀内誠一に請われて、新時代の到来を告げる『an・an』誌上で、モダンで優美なパリの香りを漂わせるようなおしゃれなファッション写真をつぎつぎと展開することとなった。その研ぎ澄まされた感覚から繰り出される写真は、この上なくシャープであることはもちろんだが、緻密で隙のない絵柄から、70年代のファッション界に新風を吹き込んだ。

当然ながら、そのスタイルはファッションにとどまることはなかった。

それはまず、傑作写真集『巴里』（1979年、文化出版局）を見るとよく判る。

これまで多くの錚々たる写真家が表してきた「パリ」。地元フランスのウジェーヌ・アジェにはじまり、ジャック＝アンリ・ラルティエ、アンリ・カルティエ＝ブレッソン、ロベール・ドアノー、ウィリー・ロニなどがいて、あるいはまた毛色の変わったところでは、ハンガリー出身のブラッサイヤアメリカ合衆国出身のマン・レイも多くの作品をパリで遺している。だが、吉田大朋の『巴里』は、彼らとはもちろんまったく違う。大体、モノクロームではなくコダクロームによるカラーである。しかも、カラーといっても派手な描写ではなく、またヨーロッパのいかにもどんよりと暗く沈み込んだ描写でもない。明るすぎず、暗すぎず、コントラストを強調しすぎることもない。よい意味で極めてオーソドックスなのだ。落ち着いてどっしりと構えて表現されたような、いわゆるチョロスナ*ではない。*チョロスナ：ちよろっとスナップするという意味で軽々しいスナップの蔑称。

その落ち着いた感じの描写というのは、こののち帰国してから京都のギャラリー何必館において撮影された富本憲吉「白磁壺」や北大路魯山人「つばき鉢」、松本竣介の油絵「寺院」などのスティルライフ（梶川芳友著『何必館拾遺』〈2008年、淡交社〉に収録）にも引き継がれている。いや、そうではない。これはそもそも吉田大朋が持ち合わせていた、日本的な審美眼であり、それを表現する確かな造形力に基づいているからにほかならない。それが『巴里』であり『何必館拾遺』に現れているのである。

それともうひとつの傑作写真集が『L'ART DE MADAME GRES グレの世界』（1980年、文化出版局）である。マダム・グレ（1903-1993、本名ジェルメーヌ・エミリー・クレブ Germaine Emilie Krebs）は、20世紀フランスを代表するファッションデザイナーの一人である。

この写真集の冒頭に現れるマダム・グレの3点のモノクロームによるポートレートにまず驚かされる。ブレていりしピントもやや甘いのであるが（これは老齢のグレへの配慮もあるのだろうか）、そんなことより、この大判（約天地330mm×左右253mm）写真集の見開きに裁ち落としで、アートディレクション・レイアウト＝村越襄によってデザインされたページはまことに大胆で功を奏しているのであるが、そこに展開されるまるでグレの心情を射貫くように真っ直ぐに伸びた吉田大朋の視線による描写は、臨場感に溢れて迫力満点である。そして、本題のグレのファッションデザインにおいては、まさにエレガントと呼ぶにふさわしいアーティスティックな作品衣装が、モノクロームとカラーでつぎつぎと登場する。そのところどころでは、モデルの顔が平然とカットされる。ここでもまた大胆かつギリギリのフレーミングで捉えられたショットは、グレのモードを鮮やかに浮かび上がらせることとなる。極めて美しく、気品に満ちた作品集である。

吉田大朋は、1934年に東京都杉並区荻窪に生まれた。その生まれ故郷の自負からか、傾倒する永井荷風と歩調を合わせるかのように、江戸趣味を感じさせるモノクロームによる風景・スナップ作品を遺している。写真展「東・京・都・市」（2000年、銀座ニコンサロン／『日本カメラ』）は、本展のタイトル同様に「軽妙洒脱」な、しかし軽々しくないキラリと光る作品展であった。

そしてまた、写真集『古都 京の四季』（1982年、朝日新聞社）では、東京人でありながら、まるで京都の人であるかのように、京の粋を表していた。これは血のなせる技であろうか。そう、吉田大朋の父以前は、京都を故郷とする人であった。

吉田大朋さんは、2017年2月10日、心筋梗塞により逝去された。享年82歳。本展を楽しみにしていただけに、残念至極。合掌